

闇討ち

中野
劇団

闇討ち

作・中野 守 (中野劇団)

登場人物

与兵衛 (よへえ)

旦那

佐助 (さすけ)

瓜井 瓜左衛門 (うりい うりやえもん)

武士の時代。

夜の林道。旦那、鼻歌まじりに歩いている。

進路を塞ぐように与兵衛が刀を抜いて立っている。

旦那 ん？ だ、誰だ！ 貴様！

与兵衛 瓜左衛門覚悟！

旦那 ひっ、ひいひいひい！

道を外れ、森へ入り茂みを掻き分け逃げる旦那。追う与兵衛。刀で斬る音。

与兵衛 はあっ！

旦那 ぐあああ！

与兵衛 ハアハアハアハアハア……。

(与兵衛の声) やったか。……お初ちゃん、お袋さんのかたき、討ってやったぜ。
……とつとつと片付けないと。

旦那の死体をひっくり返す。

与兵衛 ハア……ハア……。

(与兵衛の声) ……うわこれ違うんだ。瓜左衛門じゃない。…ええ？ どうしよ。
ええ？ ちゃんと確かめるんだった。…殺っちゃったなあ。こう暗いなあ。とつ
ととずらからう。(とつとこハム太郎の音階で) とつととずらからう。……くそ、

刀が抜けぬ。

遠くから佐助の声。

佐助 (声) 旦那様あ。

与兵衛 ……。

(与兵衛の声) ええ？ やばい。旦那ってこいつか？ どうしよ。

佐助 あ、旦那様。こんな所におられましたか。

与兵衛 え？

佐助 こんな暗い場所ではいかなされましたか。

与兵衛 ……いや、用を足しておった。

佐助 今さっきもされておいででは？

与兵衛 ……近いのだ。

佐助 はあ…。何だか話し方がいつもと違うよう…。。

与兵衛 ……うん、そうなのだ。用を足しながら考え事をするであろう。ふと、今までの

自分で急に嫌になつてな。特に話し方が。

佐助

ああ成程。ありますよねそういうこと。しかし、用を足すのにわざわざそんな茂みの奥まで入って行くとは、相変わらずの用心深さでございますな。私など夜目が利かないもんですから、こう暗いと何も見えないでいるから用を足すなどかえって平気なもんですがね。

与兵衛

儂は用心深い男だ。

佐助

何ですか？

与兵衛

儂は用心深い男だ。

佐助

ええ。

与兵衛

儂は用心深い男だから、おまえがおまえかどうかすら疑っておる。

佐助

…何ですかそれ。

与兵衛

もしおまえが本物のおまえであれば自分の名前がちゃんと言えるはずだ。

佐助

佐助でございますが。

与兵衛

うむ、佐助よ。(名前が知りたかった)先に屋敷へ戻っておれ。

佐助

え？ 何故？

与兵衛

何故でもじゃ。

佐助

しかし、かような場所に旦那様一人残して帰ったとあっては私めがこっぴどく叱られてしまいます。

与兵衛

佐助！ 主の儂が言うておるのだ。主の言うことが聞けぬか。

佐助

いえいえ滅相もない。…わかりました。でしたらアレを。

与兵衛

アレ？

佐助

アレでござりまする。

与兵衛

んん？

佐助

いかがいたしました？

与兵衛

いや。

佐助

ないのですか、鍵。

与兵衛

鍵？

佐助

錠前の鍵ですよ。

与兵衛

ああ……。

(与兵衛の声) こいつが持つてるのか。あまりガサゴソしていると気づかれてしまふ。いっそのことあやつも斬ってしまえばいいのかも知れぬが、刀が抜けん。

佐助

いやあしかしこう暗くては物騒な輩でも潜んでいそうで気味が悪うございするなあ。ま、しかし私などを斬っても、斬った者が不憫なだけですがね。

与兵衛

不憫？

佐助

旦那様もそう思うでしょう。なにせ私にはあの弟がおります。もし私が誰かに襲われた日には、弟とその一味が私を斬った奴を探しだして、そいつはもとよりその両親兄弟、一族郎党、果てはちよつとしたゆかりのある者まで全て確実に殺してしまいますからねえ。

与兵衛

……。

佐助

(与兵衛の声) 駄目だ。何なのだこいつは。ハツタリか？ 何なんだこいつの弟の一味って。やくざ者か？

こないだも、市場で財布をスられたって話を弟にしたら、スツた奴を見つけ出して腕を折りました。どうやって探しだすんでしょね。才能ですかね。その前には弟に睨まれた奴がお上に泣きついたところ、弟とことを構えたくないお上の方がその男の話を無視したとか。……鍵、ありましたか？

与兵衛

……ああ、ええっと。…落としかかも知れぬ。

佐助 いえいえ、落とさぬよういつもあそこに入れておられたではござりませぬか。

与兵衛 あそこ？ ん？ いや、今日はいれ忘れたかも知れぬ。

佐助 いえいえ、出かける時に私に確認させたではござりませぬか。「入れたぞ、ほら間

違いなく入れたぞ」と。

与兵衛 ……そうであったな。あそこに入れてたことをど忘れしておった。

(与兵衛の声) だからあそこって何処だ？

佐助 尤もその眼鏡入れを落とすと意味ないのでござりまするが。

与兵衛 ……。

(与兵衛の声) 眼鏡入れの中か。…あ、これがこれか。

与兵衛 ああ、あったあった。

佐助 (近づき) ありましたか？

与兵衛 止まれ！

佐助 え？

与兵衛 それ以上近づいてはならぬ！

佐助 え？ しかし近づかなくては鍵をいただけではないですか。

与兵衛 だから近づくなと言っておるだろうが！ 鍵は放り投げる。

佐助 いやいや、受け損なったら闇夜にこんな草むらの中、見つけ出すのは骨でござりまする。それに日頃から旦那様は仰つてたではないですか。物を放り投げるなど。

与兵衛 駄目なものは駄目なのだ！

佐助 ……何故でござりまするか？

与兵衛 毒だ！

佐助 え？

与兵衛 毒キノコが生えておるのだ！

佐助 毒キノコ？

与兵衛 動くな！

佐助 え？ そんな、おなじやないんですから、別に毒キノコが生えてるくらい――

与兵衛 触れると死ぬぞ。

佐助 え？

与兵衛 ……死ぬぞ。

佐助 毒きのこって食べたらずが回るのでございましょう？

与兵衛 それは食べたなら毒が回る種類のきのこだ。

佐助 触れただけで毒が回るきのこもあるのをござりますか？

与兵衛 そうだ。

佐助 ……そんなキノコ、あるなんて聞いたことないんですが。あるのですか？

与兵衛 ああ。

佐助 何処に？

与兵衛 丁度僕とおまえの間に生えておる。それで僕も動けなかったのだ。

佐助 ええ？ そうでしたか。じゃあ、触れぬようにこっちの方から。

与兵衛 ならぬ！

佐助 え？

与兵衛 おまえは夜目がきくか？

佐助 いえ。

与兵衛 であるう。辺り一面毒きのこだらけだぞ。

佐助 ええ？ そんなに？

与兵衛 そうだ。

佐助 きのこなんてなさそうですけど。

与兵衛 草と同じ色をしておるからな。

佐助 ええ？ そんな危ないきのこが？ この辺りはよく通っておりますが。

与兵衛 最近急に生えたのだろう。恐らく獣か旅人にきのこの種がついて、この辺りに落

ちたのかも知れん。

佐助 え、でも触れたら死ぬんですよね。

与兵衛 そうだ。儂がそっちに行くことも、おまえがこっちに来ることもできそうにない。

佐助 旦那様には見えるんですか？

与兵衛 ああ。

佐助 しかし、お眼鏡をしてらっしゃらない時はさっぱり見えないと。ましてやこの暗さまで？

与兵衛 眼鏡を外すとさっぱり見えないので、当然暗闇でも見えなれないと思ひ込んでおったが、暗闇だと眼鏡がなくともはつきり見えることにさつき気づいたのだ。

佐助 おお。まるで猫の目のようでございますな。そういうことが人にもあるものでございませうか。しかし、それは素晴らしいことでございます。この佐助も他人事な

がら大変喜ばしい日となりました。

与兵衛 …とにかく、おまえは屋敷へ戻っておれ。

佐助 いえ、触れぬようにこうして肌を出さなければ。しかし、よくそこまで辿り着けましたね。

与兵衛 佐助。儂はそのキノコに触れてしまったのだ！

佐助 ええ？ 旦那様！ しばしお待ちを。すぐそちらへ。

与兵衛 儂に触れても伝染るのだ。

佐助 …ええ？

与兵衛 そんな毒にやられてしまったのだ儂は。だから自分が嫌になったのだ。

佐助 何故すぐ仰ってくれなかったのをございまするか！

与兵衛 驚かせようなかった。

佐助 そうでございましたか。申し訳ございません。そんなご配慮にも気づかず、はしたなく驚いてしまつて。本当にすみません。喜ばしい日などと申して本当にすみません。では旦那様にも触れないようにして――

与兵衛 佐助！

佐助 はい？

与兵衛 聞いてなかったのか！ 毒が伝染ると言っておるであろうが！

佐助 ですから触れぬように。

与兵衛 吐く息も、毒なのだ！

佐助 え？

与兵衛 きのコにも僕にも触らなくとも、僕の息を吸えば、毒が身体を駆け巡り、死に至

るのだ佐助！

佐助 旦那様……。

与兵衛 僕は大丈夫だ。

佐助 何故そこまできのコにお詳しいのですか。

与兵衛 おまえは質問が多いのう。

佐助 わからないことは全て聞けといつも旦那様が仰っているからではありませんか。何

故お詳しいのです？

与兵衛 ……子供の頃に一度間違つて食べたことがあるからだ。

佐助 ええ？ ではその時は助かったんですか？

与兵衛 そうだ。

佐助 何故？

与兵衛 この毒きのこは、口にしたとしても一步も動かない限りは、一切毒が回らぬという変わった性質の毒なのだ。しかし、一步でも動けば毒が回る。あの時は解毒薬で命を落とさずに済んだ。

佐助 そんな話、これまで一度もされなかったではありませぬか。

与兵衛 これまで誰にも訊かれなかったからだ。

佐助 解毒薬があれば助かるのです？

与兵衛 そうだ。

佐助 しかし、疑問がござりまする。子どもの時は何故解毒薬で助かるとわかったのですか？

与兵衛 だから、その時はたまたまきのこに詳しい奴がそばにいたからだ。

佐助 成程。

与兵衛 おまえは主の一大事に、よくも冷静にそんな疑問をぶつられるもんだ。

佐助 勿体ないお言葉で。

与兵衛 褒めてない。……あの時あの、きのこに詳しい奴がいなければ僕はそのときに命を落としていたであろう。僕はあのきのこに詳しい奴のおかげで一命を取り留めたのだ。

佐助 ならばその解毒薬があれば助かるのですな。

与兵衛 だが、おまえまでこの毒にかかってしもうては、二人ともここより一步も動けなくなるではないか。そうしたらどうなる？ こんな誰も通らない場所では。

佐助 では、助からないのでございませうか？ 旦那様は助からないのでございませうか？

与兵衛 だからおまえが解毒薬を取りに行ってくれないと。そのおまえが毒にかかったらいかんだらうと言っておるのだ。

佐助 成程。

与兵衛 大丈夫か？

佐助 わかりました。すぐ、すぐさま取って戻って参ります。

間。

与兵衛 ……。ふう。

佐助 旦那様。

与兵衛 まだおったか。

佐助 その解毒薬は何処に行けば手に入るのですか？

与兵衛 ああ。……隣村にそのきのこに詳しくった古い友が住んでおる。

佐助 隣村ってどっちの？

与兵衛 え？

佐助 どっち隣で？

与兵衛 に、西隣の村だ。

佐助 西隣の村の何処ですか？

与兵衛 一番外れの家だ。

佐助 外れってどう外れですか？

与兵衛 え？

与兵衛 西の村の西のはずれだ。

佐助 西隣の村の西の外れ、そこにきのこに詳しくった奴が住んでるのですな？

与兵衛 そうだ。おまえが奴って言うな。早う行って来てくれ。

佐助 行きたいのはやまやまでございますが、途中に川がありません。

与兵衛 それがどうした。

佐助 渡し賃が。

与兵衛 屋敷で女房に貰ってくれ。

佐助 奥様ですか。

与兵衛 そうだ。

佐助 奥様は二月前に。

与兵衛 ああ！ キのこだ。キのこのせいで記憶がおかしくなり始めておるのだ。

佐助 旦那様！

与兵衛 大丈夫だ。そうであった。あいつは死んだんだったなあ。

佐助 奥様死んだのですか？

与兵衛 え？

佐助 お伊勢さんに行って、そこで亡くなられたのですか？

与兵衛 いやいや、生きてるよ？ お伊勢参りしに行ってるよ。

佐助 え？ じゃあ誰が死んだのですか？

与兵衛 ええ？ いや、誰が死んだって？

佐助 旦那様が仰ったんじゃないですか？

与兵衛 いやいや。言っていない。けど毒きのこのせいで、頭がおかしくなっておるのかも

知れぬ。とにかく早く行って来てくれ。

佐助 いえでも結構ここからだと時間かかるので、お腹が空くかもしれないし、おむす

びがあるんです。それで少しはもたせられるかも知れません。

与兵衛 わかったからそこへ置いてって、すぐ行ってくれ。

佐助 けど、ここに置いたら旦那様取れないじゃないですか。一步も動けないのに。

与兵衛 あ、じゃあ我慢する、我慢するから早く。

佐助 投げましょう。

与兵衛 え？

佐助 おむすび。

与兵衛 わかった。早く。

佐助 数が少ないから、慎重に狙って投げますね。

与兵衛 もう、いいから急げよ。

佐助 でも、一步も動かない限りは毒は大丈夫なんですよね。

与兵衛 いやもう、あんまり喋りすぎたら回るから。ほらもうやばいから。……いい忘れてたがな、このきのこの毒の死に方は少々変わっておってな。毒が回ると、まるで刀で斬られたように傷口が出来て死ぬのだ。

佐助 斬られたように？

与兵衛 そうだ。

与兵衛、地面に這い蹲るふりをする。

佐助 旦那様！

与兵衛 早く！

佐助 すぐに用意して戻って参ります。旦那様、しばしご辛抱を。…旦那様、旦那様！

与兵衛 何じゃ！

佐助 しばしご辛抱を。

与兵衛 わかったから急げよ。

その時、物音。

佐助　ん？　旦那様、誰か来ます。
与兵衛　？

瓜井瓜左右衛門が通りかかる。

瓜井　いかがなされた？

佐助　あなたは？

瓜井　やや、怪しい者ではない。拙者、瓜井瓜左右衛門と申す。

与兵衛　……

(与兵衛の声)　う、瓜左衛門！

瓜井　この人は？

佐助　瓜井様、旦那様に近づかれてはなりません！　きのこが伝染りまする！

瓜井　きのこが伝染る？　何だそれは。

佐助 毒が。

瓜井 毒？ 毒きのこを食べたのか？

佐助 食べてはおりませんが。きのこに触ってしまったのです！

瓜井 ……ん？ 何？

佐助 触れただけで毒にかかってしまう、毒きのこが生えてるんです。

瓜井 な、なんと。

佐助 それでこれ以上近づくこともできないんです。近づいたら毒が感染します。

瓜井 つまりおまえの旦那は毒にかかったと。

佐助 それもかなり酷いです。頭にまで。

瓜井 むう、左様であったか。

佐助 動かない限りは、死には至らないそうなんです、一歩でも動くと。

瓜井 動くと？

佐助 刀で斬られたように全身真っ二つになって絶命すると。

瓜井 何と恐ろしい！

佐助 で、今から解毒薬の材料を取りに行くところだったのです。

瓜井 そうであったか。

佐助 では急ぐので、ごめん。

佐助、退場。

与兵衛 ……。

(与兵衛の声) 何てことだ。

瓜井 もし！ もし！ 大丈夫か？

与兵衛 お待様、私は大丈夫でございます。あの佐助はああ見えて優秀な者です、す

ぐに戻ってまいりますので、お気遣いなく、どうぞ、先へお進み下さいませ。

瓜井 そなたが死ぬかも知れぬのに放って先になど進めるわけがなからう。

与兵衛 いえいえ、私は動かない限り毒が回りませんので、大丈夫ですから。

瓜井 しかしだな。近づいてもならぬのか。

与兵衛 ええ。

瓜井 食べて毒のきのこというのは知っているが、触れて毒とは。

与兵衛 この辺りには自生しないきのことでございます。おそらく遠い地より来た旅人に種

がついて来たか。

瓜井 そのきのこはどのような形をしているのだ？

与兵衛 草の色と同化してしまっただけに見つけにくい種類なのです。しかもこの暗闇では。

瓜井 いや、私は夜目が利くので、どんな色だ。草と同化するというと緑色のきのこ

いうことか？ 普通毒のあるものは鮮やかなわかりやすい色だったりするものな

のだがなあ。そんなきのこ見たことがないがなあ。

与兵衛 ……

(与兵衛の声) くそう厄介な、瓜左衛門。こうなったら出て行って斬ってしまうか。

瓜井 触れると死ぬ毒きのこか。不思議な話もあるもんだ。もし！ 何か欲しいものは

あるか？

与兵衛 私にお構いくださいさらずとも。このとおり動かぬ限り平気ですので、どうか先をお

急ぎ下さいませ。

瓜井 ならんならん。余計な気を使わなくてもいい。不思議なこともあるもんだ。

与兵衛 この森は人を襲う夜盗の類がおるとの噂にござります。お侍様のお命が狙われ

るようなことがあつてはなりませんゆえ。

瓜井

大丈夫だ、そんな者も流石に相手を選ぶであろう。下手人にされる危険を冒してまで何の得もない貧乏武士の命を狙ったりせんだらう。拙者の命を狙う者など……。はっはっは。

与兵衛

いかがされましたか？

瓜井

そういえば拙者を誤解して恨んでおる男が一人おるとか言ってたなあ。

与兵衛

え？

瓜井

知り合いお初という子がおつてな。どうもその子の知り合いの男に拙者恨まれておるらしい。

与兵衛

お初？

瓜井

ああ。以前、私が泊まった宿にお初というおなごがおつてな。さる事情から、お初の母君を死んだことにしてくれと頼まれたことがあつてな。手を貸してやったのだが。

与兵衛

死んだことに？

瓜井

ああ。今頃母君は何処か遠くの村に落ち延びて、ひっそりと暮らしておるだらう。しかし、それを本当に死んだと思っておる男がおるとかで。

与兵衛 何故疑われていると知っておきながら、その男の誤解を解かなかったのをござり

まするか。

瓜井

拙者に申されても。いや、それは拙者も思っただけでな、お初に聞いたのだ。何故、誤解を解かねばならなかったのかと。したらば、その男は不器用な男で、嘘が下手というか、余計な嘘を重ねすぎてややこしくなるきらいがあるから、その男にだけは本当のことを言えずに、殺されたことにしておいた方がよいという風に思っただけ。まあ、その男と拙者には全く接点はないし、間違っても拙者を危険な目に遭わせるような度胸はその男になさそうだから捨ておいて大丈夫だろうと申しておったわ。

与兵衛

……。

瓜井

いやそんな話はどうでもいい。旦那の毒をどうにかせねばなあ。

与兵衛

……

(与兵衛の声) なんてことだ、だったら殺めることなかったではないか。何やってんだよーもーあーもー。あー。早く言えよー。

瓜井

旦那？ どうした？ おい、旦那？



終わり。